2019年度「大学院修了予定者アンケート」の結果報告：教育満足度と研究業績に着目して

此下友恵・石田千晃
お茶の水女子大学 教学IR・教育開発・学修支援センター

Report on the Survey for Graduate Student in 2019 Focusing on the educational satisfaction and research achievements

Tomoe KONOSHITA and Chiaki ISHIDA
Ochanomizu University; Center for Institutional Research, Educational Development, and Learning Support

This study reports on student satisfaction with graduate education. A survey was conducted at Ochanomizu University, Tokyo, Japan in February 2020. Valid surveys obtained were 157 in total, comprising 133 Master' s and 24 PhD students scheduled to complete their courses in March 2020. The respondents were asked to rate their satisfaction with their graduate education and their own research achievements. Over 80% of the Master' s students and 70% of the PhD students claimed they were satisfied with their graduate education at Ochanomizu University. Most respondents also highly evaluated their own research achievements. Therefore, it was surmised that this high evaluation of graduate education may be correlated with high satisfaction with their research achievement. However, future surveys should delineate the management and supervision of the seminars and/or laboratories since our survey had very few questions on it. Further research should also accommodate graduate students currently enrolled in the University.

keywords：graduate education　大学院教育 , satisfaction　満足度 ,　research achievements　研究業績

はじめに

本調査実践報告では、2020年2月に実施された、「お茶の水女子大学修了者アンケート」の結果を抜粋して報告する。この調査の目的は、お茶の水女子大学大学院を2019年度に修了する大学院生が、大学院の教育をどのように評価しているかを調べ、今後の教育および研究環境の改善を図る基礎資料とすることである。

調査対象者は、2019年度に修了、あるいは単位取得退学予定のお茶の水女子大学大学院、博士前期課程239名、博士後期課程41名の計280名であった。そのうち回答が得られたのは、博士前期課程が133名（文系65名、理系68名）、博士後期課程が24名（文系15名、理系9名）の計157名（回収率56.07％）であった（無効票を除く）。

調査への協力依頼は、大学で発行している院生のメールアドレスにThunderbirdを使用し、個々に送付した（2020年2月12日）。調査方法は、ウェブ調査で、教学IR・教育開発・学修支援センターで運用しているPlone（オープンソースのContents Management System）を用いてオンライン調査サイトを構築した。院生は大学の統合認証IDを用いてログインし、調査ページにアクセスして回答を行った。1名につき1票の回答を得る目的でログイン時に統合認証IDを使用したが、統計処理を施す際にはIDを切り離し、匿名性を保持した。

調査結果（教育・研究指導への満足度）

本学の院生教育に関する満足度を多角的に聴取するため、「本学の教育全般に対する満足度（Figure1）」、「本学の授業科目に対する満足度（Figure2）」、「本学の研究指導に対する満足度(Figure3)」の3つの質問を設け、各満足度を5件法で聴取した。その結果、博士前期課程については「教育全般」、「授業科目」、「研究指導」を「非常に満足」、「やや満足」と回答し

Copyright 2019. Ochanomizu University. All right reserved.

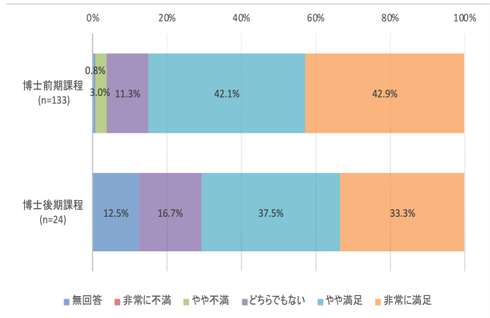

Figure 1　お茶の水女子大学の教育全般に対する満足度

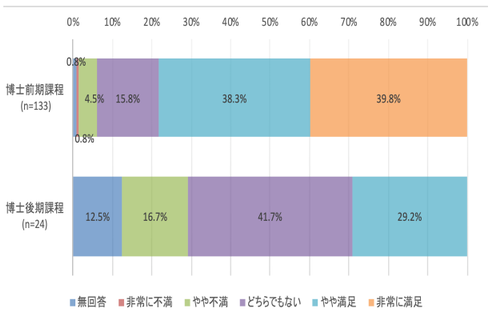

Figure 2　お茶の水女子大学の授業科目に対する満足度

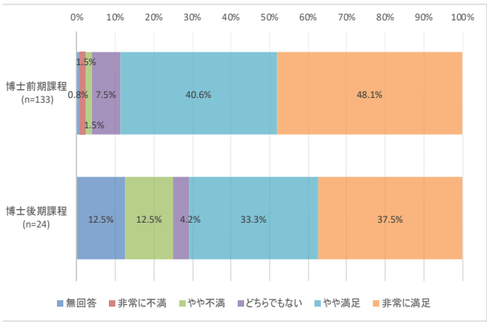

Figure 3　研究指導に対する満足度

た者が約 8 割を占めていたが、博士後期課程については「授業全般」、「研究指導」を「非常に満足」、「やや満足」と回答した者は約 7 割であり、博士後期課程の方が満足度が 1 割程度低い傾向がみられた。また、Figure2 の「授業科目」に関しては、博士後期課程では、単位科目を取っている院生が少ないことから、「どちらでもない」という回答が約半数を占めており、博士前期課程とは異なる結果になったものと推定される。

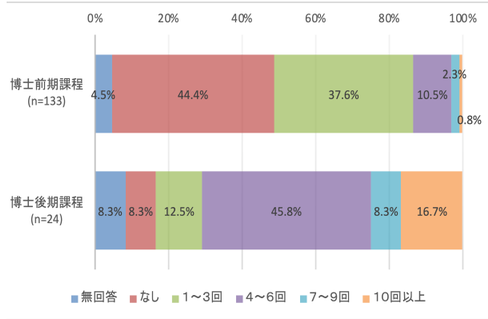

Figure 4　学会発表の回数

調査結果（研究業績）

大学院在籍中の研究業績について、業績の実態と自己評価の両側面から質問項目を設定した。業績の実態に関しては、「学会発表の回数」、「論文発表の本数」を聴取し、自己評価に関しては、「修士論文・博士論文の自己評価」、および、「入学当初の大学院進学動機が修了時点でどの程度達成できたか」を尋ねる質問を用いて聴取した。

学会発表の回数の結果は Figure4 の通りである。博士前期課程の回答者 133 名中「なし」が 44.4%、「1-3 回」が 37.6%、「4-6 回」が 10.5%、「7-9 回」が 2.3%、「10 回以上」の者が 0.8%という結果であった。一方、博士後期課程では、無回答の 2 名を除いた 22 名のうち、「なし」が 8.3%、「1-3 回」が 12.5%と僅かで、大半が修了（退学）までに 4 回以上、学会発表を行っていることがわかった。具体的には、「4-6 回」学会発表をしたと回答した割合は 45.8%で、「7-9 回」以上（「7-9 回」と「10 回以上」の合計）は 25%であった。

論文発表の本数は Figure5 の通りである。博士前期課程は、回答者 133 名中、「なし」が 75.2%で大

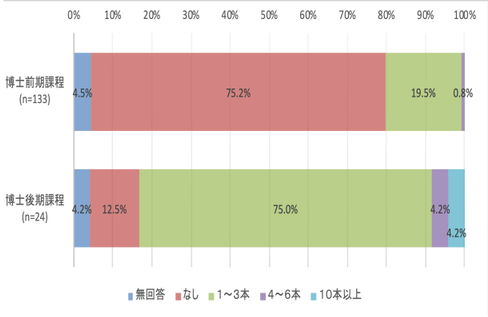

Figure 5　論文発表の本数

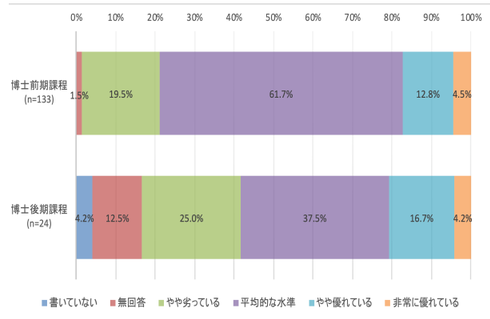

Figure 6　論文の自己評価

半を占めており、「1-3 本」が 19.5%、「4-6 本」が 0.8%（1 名）という結果であった。一方、博士後期課程は、無回答の 1 名を除く計 23 名のうち、「なし」は 3 名（12.5%）のみで、「1-3 本」が 75.0%（18 名）、4 本以上が 8.4%（2 名）という結果であった。

次に、自己評価に関する質問項目を見ていきたい（Figure6）。自身の修士論文の評価は、博士前期課程の回答者 133 名中、61.7%が「平均的な水準」と回答した。また、「やや優れている」は 12.8%、「非常に優れている」は 4.5%という結果であった。博士後期課程在籍者の自身の博士論文に対する評価は、無回答や未執筆者 4 名を除く計 20 名中、「平均的な水準」が 37.5%、「やや優れている」が 16.7%、「非常に優れている」が 4.2%という結果となった。博士前期課程、博士後期課程ともに「非常に優れている」や「やや優れている」といった高評価をしている院生は 2 割前後という結果であった。

さらに、大学院進学時の動機とその動機が在学中どのくらい達成できたかを次の方式で聞いた。まず、大学院進学動機について、以下 9 項目の中から上位 3 項目を選んでもらった（「研究者になるため」「専門知識や技術を習得するため」「学問的な関心を満たすため」「学位を取得するため」「資格、免許を取得するため」「心機一転のため」「就職に有利だから（就職時に有利になるように）」「すぐに就職せず、思索する時間を得るため」「その他」）。その上で、選んだ 3 項目の達成度を「1:達成していない」「2:ほぼ達成した」「3:達成した」の 3 件法で尋ねた。

まず、大学院進学の主要な動機については、「学問的な興味を満たすため」という回答が多いことがわかる（Figure7 内赤色部分）。理系文系別の傾向を見ると、文系では、大学院進学動機として「研究者になるため」という理由が比較的多い（Figure7 肌色部分）のに対し、理系は「専門知識や技術を習得するため」が多い（Figure7 灰色部分）。大学院進学動機は理系と文系で異なる傾向が示された。

次に、大学院進学動機として選択した 3 つの項目がどのくらい達成できたかについて「1：達成していない（1 点）」「2：ほぼ達成した（2 点）」「3：達成した（3 点）」の 3 件法で尋ね、合計得点を算出した（3

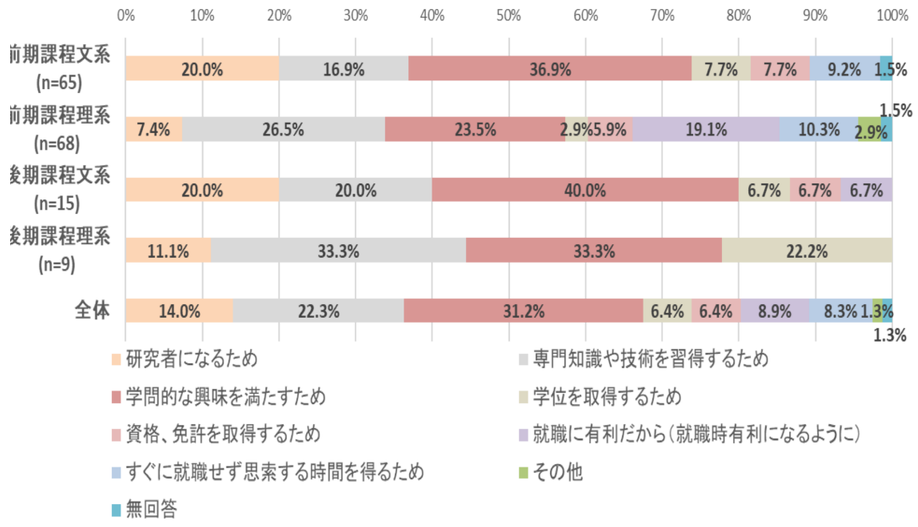

Figure 7　大学院進学の主要動機

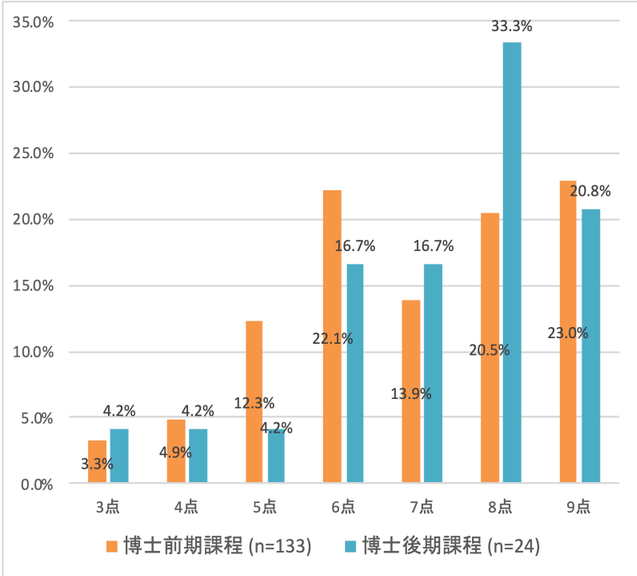

Figure 8　大学院進学動機達成度得点の分布

項目×最高得点 3 点 ＝ 9 点満点)。平均値は 6.97 点であり、全て達成している（9 点)、あるいは、ほぼ全て達成している（8 点）と評価した者は、博士前期課程で 43.5%、博士後期課程で 54.1%という結果であった。(Figure 8)。5 点未満の回答者の割合は低いものの、今後同様の調査を行うときは、達成度が低くなった原因を尋ねるような質問項目を設置し、問題の特定と改善を図ることも必要であろう。

最後に

本学大学院を修了する大学院生の教育に関する満足度は、博士前期課程者の 8 割、博士後期課程の 7 割が「満足している」と肯定的であり、概ね高い評価を得ている。また､自身で設定した目標の達成度も高い。大学教育に対する満足度は、研究成果のアウトプットにもつながることが示されており（久保，2018)、お茶の水女子大学大学院の教育に対する満足度の高さは、今後の研究成果の向上を期待させると考えられる。

今後の課題としては、学部生とは異なる院生固有の問題の改善に、さらにフォーカスを当てて、大学院教育の運営方針を立てていくことが必要であろう。例えば、岡本・北村・山内（2012）によると、研究室内外でのコミュニケーションが、自分の研究についての理解の促進や、自分の研究への満足度の向上、学術コミュニケーション能力の習得に有益であることが示されている。お茶の水女子大学の大学院生を対象に行われた調査報告（中島，2011）では、「先輩や教員からのアドバイス」を不足と感じている博士前期課程は約 2.5 割、博士後期課程は約 4 割いることが指摘されている。また、2017 年度に在籍中の大学院生を対象に実施されたお茶の水女子大学大学院生の教育・研究環境に関する調査（合澤・石田，2017）では「ゼミ・研究室の活動への満足度」は博士前期課程・博士後期課程ともに「非常に満足している」「まあまあ満足している」との回答が 7 割以下であったことからも、研究室に関する活動おおよびコミュニケーションについては向上の余地があると考えられる。本調査では、「大学院修了予定者」を対象に調査を実施したため、研究環境に関する細かな設問が設定されていない。また、大学院修了者を対象としていたため、全般的に満足度が高く示された可能性も否めない。今後は、在籍中の大学院生も対象に含め、入学から修了までのプロセスにおいて、研究室内外での研究に関するコミュニケーションやアドバイス、道筋提示といった具体的な助言についてどのような改善が必要なのかをさらに検証していく必要がある。

参考文献

合澤典子・石田千晃（2017)「2017 年度お茶の水女子大学大学院の教育・研究環境調査」の報告『高等教育と学生支援――お茶の水女子大学教育機構紀要』8，64-70.

久保京子（2018)「大学院生の研究環境と研究成果の関係の分析―2011 年・2015 年東京大学学生生活実態調査から―」『東京大学大学院教育学研究科紀要』58，135-146.

中島ゆり（2011)「お茶の水女子大学の課題―平成 22 年度「お茶大生の学習環境と生活･意識に関する調査」報告」『高等教育と学生支援――お茶の水女子大学教育機構紀要』2，64-76.

岡本絵莉・北村智・山内祐平（2012)「工学系分野の研究室における集団活動と大学院生の満足度および成長の自己評価と研究業績の関係」『科学教育研究』36，14-26.

2020 年 3 月 22 日　受稿